

## 第5回高等学校改革プラン推進委員会（第四推進委員会）議事録

1 日時 平成17年8月12日（水）午後2時00分～午後5時00分

2 場所 長野県松本勤労者福祉センター 第1会議室

3 出席委員

中條 利治委員長	野口 廣子委員
百瀬 哲夫副委員長	下川 隆委員
宮川 正光委員	丸山 哲弘委員
小林 進委員	藤本 光世委員
神澤 鋭二委員	長谷川 功委員
今井 隆一委員	鈴木 義明委員

4 開会

（西牧主任教育支援主事）

本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。それでは委員長さん、よろしくお願いします。

（中條委員長）

それでは改めまして、お盆直前ということで皆さんお忙しい中、またお暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。

第5回の第4通学区の推進委員会を、これから開催させていただきます。よろしくお願いいたします。まず、前回の7月27日になります第4回の議論を振り返りということで確認させていただきます。

最初に県教委のほうから他通学区の審議状況、それから続いて資料説明をいただきました後、いったん個別の魅力付け論議ということで特に連携高校、例えば中高一貫というような意味合いでの連携の仕方についてということで議論を進めました。

その中では、いわゆる地域高校では高校間というよりも、むしろ中高間のほうが例えば専科の教員の先生方も、兼任なり、融通なりという観点から必要性が高いというご意見。それから本来の中高一貫という意味合いでは、狭いエリアでそのままの集団が何年も変わらず高校までということでの、むしろその弊害というご意見。特に一番多感で変わっていく時期であり、従来の序列のままではその機会を奪ってしまうことにもなりかねないということで、否定的な意見も多かったと記憶しております。そういう意味で、果たして魅力付けの手段としての中高一貫はあり得るのか。むしろ一貫ではなく、中高連携のほうが必要ではないか、そういうご意見でした。県教委のほうから、タイプは幾つかありますが、全国で公立での中高一貫校の状況について120あるそうですが、今のところは長野県はゼロであり、特に地域に根差した中高連携が今後重要であろうというご説明がありました。

それから教員の兼務につきましては、研修目的で中学の先生が高校で研修をされる等はあるそうですが、本来の兼務、兼任ということでは今のところないと。ただし、専科の兼務等は市町村教育委員会および県教委等の調整によって、認めることは可能であるという

ご説明はいただいております。

これが休憩前まででして、休憩後このままの議論を進めていっても抽象論になりかねないということで、今後の進め方について委員の皆さまにご意見をいただきました。その中では、このまま抽象的な議論を続けていったときに、最終報告のイメージがわからないといったご意見がありました。

それから第4通学区には既に総合学科としての志学館、多部制・単位制を前提としての筑摩高校があるので、総合学科、多部制・単位制高校の現状の課題を整備をすることで、特に多部制・単位制という意味ではマイナス1というカウントがされますが、そういう意味での数の論議にも入っていけるのではないかというご意見もありました。

それから新しい形態の高校の提言をすべきだ、具体的にどの地域にどんな学校が必要かという提言をすべきだというご意見。

それから県教委に再編案で実名の出た高校は、推進委員会へ生の声を伝えたいはずであるというような多数のご意見がありました。何をもって「生の声」というのか、仮に聞いたとしても残してほしいという意見がほとんどではないか。また全校ヒアリングをしたり、地区ごとの委員会開催は現実的に無理であろうと。また必要があればその時期にヒアリングすることはあり得るという、ある意味反対的な意見も複数ございました。

それから前回出された、進学学科アンケートを踏まえ、実態を踏まえた学科設置等の検証が魅力付けであって、そこから数の論議にもつながるのではないかというご意見。特に農業高校については資料の読み方にもよるかもしれませんが、過半数が将来的な希望のないというような実態では、それだけを見れば不要論さえあり得るというようなご意見もございました。

それから今の学科設置等の検証という意味では、検討委員会と並行して行われた懇話会でも学科設置の適正化が論議されており、それが検討委員会の最終報告もしくは審議過程にも当然反映されたはずであって、再編案のプロセス検討でいいのではないかと。新たに我々として、それを別に検討しなくてもいいのではないかというご意見もありました。

それから魅力付けとしての高校の使命、これは生徒にとっての、地域社会にとっての使命ということでしたが、ここを議論すべきだと。結果として、そのことが選択制の拡大につながるのではないかという意見でした。

それから再編案をたたき台として、個別論議するべきではないかということ。個別論議も一般論ではなくて、ある程度10区、11区、12区という旧通学区に分けて考える必要がある。それから総合学科、多部制・単位制を第4通学区として地域ごとではなく、むしろ全体論議が必要であるということ。

このようなご意見に、今日以降のことになりますが、方向付けとしては県教委の示された再編案。確か校名提示ではなくて、その過程、検討プロセスを次回以降開示してもらいたい。その中で反映されたであろう、検討委員会として行った学科、進学希望等のアンケート結果の検証等、魅力付けの確認を行いながら、地域ごとの必要学科、学級、学校数など、数の論議に結び付けていこうという意見。

それからヒアリングは全校実施しないと公平性を失うが物理的に困難であり、今後の議論の中で必要なときに必要な学校のヒアリングを、必要に応じて行うこととしたらどうかという提案。

また第4通学区全体の論議では、具体的論議にはなり得ず、かと言って分科会設置も非効率的であり、推進委員会全体として各地域の論議を行うこととしたらどうかというのが、前回の今後の検討の進め方という中での方向付けだということで記憶をしております。

従って今回第5回になりますが、まず総合学科、多部制・単位制の具体的検討を行いまして、個別論議として今後の具体論、数の論議に至るという中での具体論については、県教委のほうから再編案の検討プロセスの中でも改正が可能であるのか、もしくはたたき台として何か用意をしたものを踏まえて議論を進めるか、その辺の確認を最後にさせていただいて、第6回次回につなげていきたいと思っております。

それでは、議論に入ります前に県教委のほうから他通学区では第4回ないし第5回が既に行われておりますので、他通学区の審議状況についてご説明、ご報告いただきたいと思います。

（西牧主任教育支援主事）

では、よろしくお願いします。

7月27日以降、開かれました他地区の推進委員会の状況についてご説明申し上げたいと思います。8月7日の日曜日ですが、上田市におきまして第5回の第二推進委員会が開催されました。当日前半は資料についての質疑、これが集中的に行われ、後半は総合学科と多部制・単位制について集中的に審議が行われました。

その中では、代表的な意見として、総合学科については高校入学後1年間キャリア教育が保証されるのは非常によい、あるいは職業学科の施設を利用してキャリアアップが図れるのがよい、あるいは科目選択にあたっては、自由選択といってもガイダンスをしっかりと行う必要がある、その点塩尻志学館高校の生徒は今輝いていて、クラブ活動にも興味があるというようなご意見をいただきました。さらに、多部制・単位制につきましては、東信地区に配置される多部制・単位制にも通信制課程を設置してほしい、あるいは他通学区の状況などを慎重に考える必要がある、このような意見、さらには、全体的にその他として、財政事情を考慮すると教育の効率化の観点からも考えていく必要があるのではないかというようなご意見をいただきまして、次回第6回につなげるということになっております。

続きまして翌日の8月8日の月曜日ですが、県庁におきまして第5回の第一推進委員会が開催され、魅力づくりに関連して総合学科について審議がされました。そこでは代表的な意見として、まず総合学科設置の前に基礎学力を高めることが必要ではないか、あるいは高校生に安易な逃げ道を用意していることにならないかというような意見、それに対しては、安易な科目選択にならないように、学校としての歯止めをきちんとしていく必要がある、あるいは科目選択に関連して、総合学科というのは動機付けには非常によいシステムであるというようなご意見をいただいております。その後、今後の議論の進め方についてご審議いただきまして、次回の第6回につきましては、候補案についての審議を踏み込んで行うというようなことで終了いたしております。

以上でございます。

(中條委員長)

ありがとうございました。

何か質問はありますか。よろしいですか。

それでは続いて、お手元に資料 1 から 10 までございます。前回の我々の第 4 通学区の推進委員会では特に今回要求された資料はございませんが、1 から 10 までの中で我々の今日の議論を踏まえまして、総合学科および多部制・単位制の面というものも含まれておりますので、既に一部ご紹介いただいたものもございますが、振り返りも含めてその辺を中心に、後はポイントということで関係する資料の説明をお願いします。

では、よろしくお願いします。

## 5 資料説明

高校教育課西牧主任教育支援主事から説明 【説明内容省略】

(中條委員長)

はい、ありがとうございました。

ただいまご説明いただいた資料 1 から 10 までですが、何かご質問等ございましたら発言願います。

(百瀬副委員長)

お願いします。

確認でございますが、資料 1 番ですが、裏のほうに私学の進路状況ということで、その一番右端のところに、進学希望達成率というものがございまして、これは進学希望者のうちの合格者数の割合と、こういうことで理解をしてよろしいかどうか。

それから資料 2 のほうで、4 年制大学の表のほうです。これは公私立合わせたという数字のようですが、そこで卒業者数と進学者数が出ておりまして、そしてその率というものが出ておりますが、これは卒業者全体の中の進学した者の数で、その割合が 30 何%ということで理解したわけです。資料 1 の先ほど申し上げました、私学の進学希望達成率について、私が先ほど申し上げた理解で正しいかどうかということでございまして、お願いします。

(中條委員長)

では事務局からお願いします。

(西牧主任教育支援主事)

百瀬先生がおっしゃったとおりでございます。

(百瀬副委員長)

ありがとうございました。

そうしますと、資料 2 で言っている卒業した数に対する進学者数の割合、私学の場合のいわゆる進学率ですね。こういう数値は私学の場合にはないわけでしょうか。お分かりに

なりますでしょうか。お願いいたします。

（柳澤教育主幹）

資料2につきましては、下の注にございますが、公立と私立を合わせた4年制大学の進学率、また裏の短期大学への進学率も公立、市立を合わせた進学率と、こういうことになっております。

（百瀬副委員長）

私学だけの進学率はありませんか。

（柳澤教育主幹）

現在、ちょっと手持ちにはございませんので、お出ししたいと思います。

（百瀬副委員長）

はい、ありがとうございます。ちょっとこの数値をザッと見ると、達成率というのと進学率というものの区別がつきにくいような部分もありまして、私学のほうは非常に数値が高いものですから。確かに私学のほうも非常に頑張っていることは、私も承知はしておりますけれども、ひとつそんなことを感じたものですから。

ありがとうございました。

（中條委員長）

はい。通常進学率については次回第6回のときに、もし資料等事務局のほうでお持ちでしたら提出していただきたいと思います。

ほかに何かありますか。

（小林委員）

資料5ですが、志学館高校の総合学科のことについて、4年制大学と中退者が、非常にいい方向へいっているという話をいただきました。志学館高校の隣に武蔵工大二高がありますね。それとの授業の交流というか、単位の関係から、交流が非常にいいということが新聞に出ていたと思いますが、いつごろから始まって、その成果はどうかということ。いい成果が出て、例えば4年制大学の進学率もよくなったり、中退者が減少したというようなことが関係してくるのかどうかということについてお聞きしたいのですが。

（中條委員長）

では事務局お願いします。

（柳澤教育主幹）

学校間連携ということで、私立と公立の学校が単位互換を行っているというのは志学館と武蔵工大二高が初めてございますが、いわゆる県立高校同士ですと、既にずいぶん前から、3組6校で連携しておりまして、学校間連携ということで違う学校に行って単位を取

るというようなことはやっております。

塩尻志学館と武蔵工大二高が始めたのは、昨年からということでございます。従いまして、それと今の中退率の減少というのは、直接的には関係がないかなというふうに思っています。

先ほどの資料5のところの4番の中退率のところ、平成12年に総合学科が開設になりまして、平成14年に総合学科が完成するわけでありましたが、表にありますような数字で推移しておりますので、学校間連携というのが直接ここに影響しているかということは、必ずしもそうとは言えないということでもあります。

(中條委員長)

よろしいでしょうか。

はい、ありがとうございました。

ほかに資料に関して、ご質問はございますか。よろしいですか。それではまた、議論の中で必要なものについてご質問をいただければと思います。

それでは具体的な論議に入らせていただきますよろしく願いいたします。

それでは最初に、多部制・単位制につきましの論議を進めていきたいと思います。それぞれ皆さん、もう既に頭の中に入っていらっしゃると思いますが、いったん再編案としては多部制・単位制を1から4までの通学区の中に1校ずつ設置をするということで、我々第4通学区については先ほどご説明いただいた、通信制、定時制と全日制普通科も併設していますが、松本筑摩高校をというのが再編案の中に書かれた内容になります。

一方、それに伴ってという意味でいきますと、我々の第4通学区では、旧10区に木曽高校、それから旧12区に池田工業高校に定時制がございしますが、それにつきましてはそのまま維持存続という前提になります。一方旧11区の松本工業高校、先ほど資料等にもございましたが、現在は学科としては工業科の定時制という扱いで1学級の募集になっておりますが、その松工の定時制につきましては、再編案上は新しい多部制・単位制高校に統合ということが前提になっております。

従いまして1校ということになりますが、それぞれ学校間連携等々もありますし、それから地区でいえば大北、木曽、それぞれ先ほど定時制と通信制等の資料等もご説明いただいておりますけれども、それぞれ関連するであろう内容ですので、ぜひ活発なご意見、議論をいただきたいと存じます。

どれからでも結構です。もしくはご質問等があればということも含めて、いただければと存じます。

今の説明以外で、何か補足、違っているところを含めて何かございますか。よろしいですか。

それでは、この委員会の中ではありませんが、新聞でしたか記憶が定かではありませんが、今回の多部制・単位制の設置に伴って、「どこ」というのは後回しにするにしても、現在ある全日制の普通科が廃止をされるというご意見。要は昼間部がなくなってしまうというようなご意見だったように記憶をしておりますが、そんな記載が新聞か何かにありましたが、その辺の事実関係だけ簡単にご説明いただければと思います。

(吉江高校教育課長)

お答えいたします。

こちらの第4通学区の場合には、今お話がございましたような形で松本筑摩高校がいかがかというような案が出ているわけですが、北信地域、第1通学区におきましては現在、坂城高校というところが普通科ということで全日制で配置されているわけです。私どもの候補案でまいりますと、これを多部制・単位制に転換してはいかがかというような案が出てございます。

また東信の第2通学区におきましては、現在野沢南高校というところが、やはり全日の普通科でございますが、ここを多部制・単位制ということで転換を提案させていただいております。さらに第3通学区、南信地域でございますが、箕輪工業高校というところ、これは工業系と普通科系が両方入っているわけですが、ここにつきましてやはり多部制・単位制ということで、転換してはいかがかというような案がございまして、それぞれの地域、とりわけ現在具体的な議論が始まっているところの、第1通学区におきまして、そこが全くの全日制からの転換がどんなものかというような議論がなされているというような状況でございます。

(中條委員長)

すみません。

わたしの質問が分かりづらかったかと思いますが、現在松本筑摩高校には3学級の全日制普通科がございまして、その全日制普通科3学級の扱いは、多部制・単位制の移行によってどうなるのでしょうか。

(吉江高校教育課長)

松本筑摩高校で申し上げますと、今、委員長さんからお話がございましたように、3学級が全日制ということで募集をしてございますので、この募集につきましては、せんだって何かの機会にお話し申し上げたかと思いますが、私ども募集定員は毎年見直しをやっております。

その見直しの中では従来の旧12通学区ごとの、この地域でいきますと旧10通、旧11通、旧12通というような、地区ごとに見るわけですが、その地区ごとに見る中の旧11通学区の中の全体の募集定員の中で、それぞれの学校にその3クラスが必要だという数であれば割り振るというようなことで、今後全日制の定数は決めてまいりたいと考えている次第です。

(中條委員長)

私だけ質問してもいけませんので、何かご意見、ご質問等あればお願いします。

(鈴木委員)

今の課長の話とも関連しますが、いわゆる候補案を見て考えていくときに、第2回目だったか、第3回目だったと思いますが、小口委員が委員会の結論として、例えばこの再編成案については22年度から実施してはどうかというような、そういう言い方では駄目な

のかという話に対して、吉江課長さんは、やっぱり平成2年からの生徒減があるから、19年度実施でお願いしたいというお話があったと思います。

そうなると例えば旧11通でいうと、第1回目の資料では、17年度と比べ20名ほど減る程度で、ほとんど減らないんですね。県の教育委員会のほうでも17年度は旧11通は70学級、19年度は70学級という、こういう試算をされているのですが、筑摩の3学級がなくなったときに、その3をどういうふうに割り振るかということになると、結局市内校に割り振るという形しかないのだと思うんです。そうすると松本の市内校普通科という、例えば深志は8、県ヶ丘が8というように、最終報告の中にあった標準規模の6をかなり上回った学校も多いんですね。そうなると例えば候補案にあったような形で松本筑摩に多部制・単位制を入れて、全日制の募集停止をした場合の3学級分は、かなり大きな学校をつくる形になると思うんです。

ただ候補案は31年度をにらんでいるというふうに書いてありますので、そうすると旧第11通といえば、およそ今年度から見れば80人くらい減るので、そうすると1学級分くらいどこかへ振り分ければよいということになりますが、そうなると先ほど言った小口委員が19年度実施じゃなくて、例えばこの高校改革推進については22年度実施だとか、あるいは25年度実施だとかというような、そういう年度の指定をしていかないと、候補案の審議についても非常に難しい部分があるんじゃないかと思います。

その辺のところも、ちょっとお聞きした上で、議論をしていきたいと思います。

(中條委員長)

実施年度ですか。

(鈴木委員)

そうですね。

(中條委員長)

特に多部制・単位制ということに関して。

(鈴木委員)

はい、関して。

(中條委員長)

事務局でお願いできますか。

(柳澤教育主幹)

このスケジュールにつきましては、第1回目のときに検討依頼事項と一緒に合わせてお願いをしていますが、この各推進委員会から報告をいただいたものを踏まえまして、県教育委員会としての実施計画を、今年度末をもって策定をしたいということで、スケジュールをお示ししてございます。現在、この方向で考えております。

従いまして、この計画が実施に移されるのは19年度からということでございます。個別



の問題はさておきまして、全体的なことを考えてみますと、先ほどもちょっとお話がありましたが、生徒の減少の状況を見ますと、最終報告書にも平均学級数が出ておりますが、ずっと下がってまいりまして、1校、1校の規模が縮小してしましますが、1校だけ先にやるということはできません。

やっぱり県全体としての再編整備の中で進めていくということが必要かと思っております。

（鈴木委員）

意見ですが、平成2年度のピークのときには、田川が10学級だとかかなり無理をした形でもって吸収していたと思うんです。そうすると現状が、例えば深志、県ヶ丘の8というのは、きっと大きすぎる学校と思いますが、かなり状況がよくなっているを見て、特に旧11通については減少枠というのはほとんどありません。平成2年度比でいえば、17年度は65.1、31年度の急減というところを見ても62.3、29は66.4と、むしろ増えている状況です。そうなるところで筑摩の3を、一気に19年度に減らしたときに、また平成2年度に近いような過大な学級数を抱える全日制の普通高校が、また出てしまうのではないかという気持ちもあります。

（中條委員長）

すみません。ちょっと基本的な質問ですが、今の鈴木委員の話で、現状旧11通は合計学級数が70学級ですね。平成31年をベースにした案としては、それを67ということで、今ご説明があったように3学級減という数字でいったん出されていますが、どこにするかは別にして、総合学科は現状塩尻志学館に6学級がありますが、この6学級は67の中に含まれている。

この多部制・単位制への移行を前提に、仮に案どおりで見たときの、筑摩の全日制3学級分は67に含まれない。多部制・単位制の学級数というのは67にはカウントされていないということですか。

（柳澤教育主幹）

はい。

（中條委員長）

そうすると鈴木委員がご質問になったところということですね。

分かりました。皆さん、よろしいですね。

そうすると多部制・単位制を何学級になるかちょっと分かりませんが、2学級ないしは4学級とかとカウントしたときには、67プラス多部制・単位制の学級数というカウントでいいんですか。吉江課長、お願いします。

(吉江高校教育課長)

一応区分けとしまして、67 あるいは私どものほうでご提案しているところの 75 という学校数、これは全日制の公立学校に通われている生徒さんの数をベースにしております。それでそれ以外に今日もお示ししている数字の中にございますが、定時制に通われている生徒さんの数というものがございまして、これは外だしをしております、その中で基本的には多部制・単位制のほうはカウントしているというようなことでご理解をいただきたいと思います。

それともう 1 点、鈴木委員さんからお話ございましたような、大規模校云々という議論はありますけれども、恐らく今回の見直しに付随しまして、例えば旧 11 区、この通学区の普通科自体が今、配置されているところはここ、ここというのはあります。

例えば箕輪工業高校が、私がちらりとちょっと委員長さんのご質問の真意をちょっと踏み違えまして、説明した中に出てまいりましたように、現在の箕輪工業は普通科と工業科が入っています。

そういうようなものが、今後は再配置絡みの中で検討されてくるだろうとも考えています。それでその前提の中で見ますと、現在も現行のこちらの旧 11 区で申し上げますと、将来的に 3 クラス減るという絡みの中で、このような数字でお願いできるかと考えている次第でございます。

(鈴木委員)

今から増やす場合もあるということですか。

(吉江高校教育課長)

あり得ると思うんです。

(中條委員長)

今のところで、例えば転校ないし転部というのものもあるのかないのか。仮に筑摩の今の 3 学級の生徒さんたちは、卒業までが全日制普通科扱いであって、その学年の下から例えば多部制・単位制の生徒さんたちが入ってきて、単純に見るとさっきの資料のご説明で午前部、午後部となって、希望すれば午前、午後、単位制ということですから、必要な単位を取って、年間もしくは 3 学年で何単位ということで卒業になると思いますが、全日制の子どもたちが、例えばその多部制・単位制の午前部、午後部ということに変わっていくということではないということですか。

(吉江高校教育課長)

現在で申し上げますと、例えば今の松本筑摩高校の場合で申し上げますと、全日のカリキュラムと今の松本筑摩の中でいうところの昼間部、夜間部という形での多部制のイメージとの背丈が合わないと申しますか、現実的にはなかなか難しい状況だと思っています。

ですからそういう意味での転部は難しいと考えておりますが、今後の方向といたしますと、今回そういうことで 4 つの地域に多部制・単位制をつくと同時に、合わせて方向とすれば、今後夜間部でいうところの定時制も、単位制への移行ということを私どもは考え

ています。

単位制に移行しますと、ご案内のように最終 74 単位以上取得すれば卒業というような形になりますので、そういう意味では今後は転校や、あるいは今のお話の転部とかそういうような位置付けのものは、よりたやすくとなると、しやすくなるというような形にはなっていないかと考えている次第でございます。

（中條委員長）

ちょっと細かい議論にはなっていますが、多部制・単位制についてご意見、ご質問があればお願いいたします。

なければ、時間がもったいないので聞いていきますが、ここに書いてある設置学科のイメージというか、要はAさんの1週間と書いてあるところですが、これは素人目には普通科に見えるのですが、単位制という意味は分かりますし、午前部だ、午後部だ、夜間部だというそれも分かるのですが、単位の取り方は別にして、県教委がイメージされている多部制・単位制というのは、この中で決めれば実業高校にもなり、この中で決めれば普通高校にもなるということなんでしょうか。

（柳澤教育主幹）

資料6の単位制高校のイメージにつきましては、現在長野県で提案している多部制・単位制は、こんなふうなことが考えられるのではないかとということのひとつのモデルとして出してもでございます。

今の設置学科の問題につきましても、これは仮に普通科と置いてありますが、設置学科についてもほかの学科ということも当然考えられましょし、あるいはコース制のようなことも実際に設置ということで、具体的な検討をする中では、そういうこともあり得るだろうと思っておりますので、この資料の中では取りあえず普通科ということのイメージでお示しさせていただいているということでございます。

（鈴木委員）

ちょっと、じゃあいいですか。

事務局が説明すればいいことであるとは思いますが、教育要覧などを見ると、松本筑摩は現在定時制の昼間課程、夜間課程があり、昼間課程というのは、もともと東洋紡の社員が中学校を卒業して新潟のほうから来て働いているわけです。その子たちが交代勤務をやるわけです。その子たちが定期的に午前の部の4時間授業をやって、高校の卒業資格を取っていたというのが前身なのです。

東洋紡が閉鎖して、この昼間定時制のところに、現在どういう状況があるかというと、恐らく8割ぐらいということなのですが、中学校や、あるいは高校等で不登校傾向になって、全日制の1日6時間の授業に耐えられないという子が入ってきている。そのことは、この松本地域だけではなくて、かなり広いニーズがあって、上田のほうからも通ってきている生徒がいて、それをいっそ昼間定時制、夜間定時制というのではなくて、定時制の多部制、要するに午前の部、午後の部、夜の部という多部に分けた学校にしたかどうかという、そういうことなんです。

既に筑摩高校は、今言ったように、昼間定時制と夜間定時制があるので、それを午前の部と夜間の部として見ていけば、それは多部制になっていく。ただ3部制ということになった場合に、現在実際には活動はされていますが、特別講座というのが4時間午後の時間帯にあって、その午後の特設講座を午後部というふうにすれば3部制になって、多部制の高校ができる。

単位制ですから、1時間目から4時間目まで授業を受けなくても、ここにあるように午前の部の3時間目と4時間目を受けて、午後の部の1、2、3、4時間を受けながらいけば、3年で卒業も可能だ。ただ1から4だけでいけば、4年間通わないと定時制課程ですから卒業できない、そういうのが単位制です。

従って筑摩高校には、昼間定時制と夜間定時制という母体があるので、それをうまく多部制に移行していけばいいということだと思ふんです。そのときに全日制の1から6まで、1時間目から6時間目までで活動する生徒と共存できるかどうかという、そういう問題が出ていると、こういうことだと思ふんです。

(中條委員長)

では、もし本人が希望すれば多部制の子どもたちも6時限を取ってもいいわけですね。

(鈴木委員)

そうですね。

(中條委員長)

4時限だと4年生になり、かつ6時限であれば3年、3学年制。

今、鈴木委員から説明いただいたように、いずれにしても、全日制普通科と多部制という違いの中で、取ることも可能ではあるけれども、扱いとしてはまた違うということですから、3学級分がここで廃止になるということですね。

学生数の増減からしたときに、3学級がどこかに足されないということであれば、もしくは最初から削減をするという前提であれば、11区に関していうと、3学級分が母集団とすると減ってしまうという影響も出てくるということと、あとは松工にある定時制が多部制の中に移管をされて、松工からは現時点では定時制というものの廃止をされるというのが多部制、単位制設置に伴う影響というか、内容ということになります。

特にご意見ありませんか。なければ出るまで、質問を続けていきます。

松工には工業系の定時制があるということですが、それが中身はこれから考えるということかもしれませんが、現時点を前提にすると筑摩には工業系の定時制というのはありませんが、13名の子どもたちが今工業系の定時制で学んでいるはずですので、その辺の扱いはどうなるのでしょうか。

(西牧主任教育支援主事)

特に松本工業の場合、在校生につきまして特に中学校のときに不登校経験者が多いということで、アルバイトを含めた就労を進めていくという状況のようです。アルバイトを含めて就労しているわけですが、4年生を卒業するときには半分以上の生徒が、アルバイト

先のほうに、そのまま就職をするという状況です。

その就職先の方ですが、必ずしも今学んでいる工業科の関係のほうに就職するわけではないということをお聞きしております。

（中條委員長）

答えになっていないような気がしますが、工業科を学んだから製造業に行くとも限りませんので、今、工業科を学びたいという子どもが結果としてどこへ行こうが別として、今、学びたいというニーズに対しては応えない、もしくは応える、どちらなのでしょう。

（柳澤教育主幹）

今 13 名が入学しているというお話がありましたが、実態は今、こちらから説明させていただいたことになります。

工業科への定時制へのニーズといいますか、希望する生徒、工業科だからその定時へ行くのだというニーズは極めて少ないという状況がございまして、これまでも実は一番近いところだと、平成 15 年に中野実業高校定時制の機械科を普通科に、転換をしてきました。あるいは、これは工業科ではございませんが、飯田長姫高校の商業科も普通科に転換してきたという経緯がございまして、これはあくまでも大きな流れの中では定時制の職業科を、普通科への転換をしていくというようなものが基本的には方針としてございまして、そういうことを順次進めてきているということがあるわけですが、従って今回の松本工業と松本筑摩、先ほどの通学区の今日お出ししました資料の 8 をご覧いただきますとお分かりのように、松本筑摩と松本工業の入学してくる生徒、ほとんど第 11 区なわけですが、ダブっているというようなこともございますので、そういう意味では松本筑摩のほうへ統合ということも十分可能ではないかということで、校名を挙げさせていただいたことであります。

（中條委員長）

いま柳澤先生の説明いただいた資料で、池工の定時制はもともとはやはり工業科だったのですか。最初から普通科だったのでしょうか。

（百瀬副委員長）

池田工業はもともとは農業科ではないでしょうか。

（中條委員長）

農業科ですか。

（百瀬副委員長）

昔は、北安曇農業と言っていて、全日も定時も農業科だった。

(鈴木委員)

普通科になったのは最近だと思いますけど、機械科も最近になってからだと思うのですが。

(百瀬副委員長)

10年くらい前には、普通科になったのでございますけど、私も大町にいたころですから、いつごろから実業科になっちゃったんですかね。

(中條委員長)

学校要覧に年譜みたいなものでありますか。

(吉江高校教育課長)

すみません。これから学校へ確認いたしますのでお待ちいただけますでしょうか。

(中條委員長)

次回でも。

(吉江高校教育課長)

じきわかりますので、対応させていただきます。

(中條委員長)

いずれにしても、今のご説明は中野実業等も、もともとは職業科なり実業科だったのが、ある時点ではニーズという観点から普通科に転換されていると。従って松工の現時点、工業科の定時制についても将来的には普通科の中で吸収可能という判断をされているという理解でよろしいですね。はい。

多部制、定時制について、ご質問、ご意見があれば。

(鈴木委員)

定時制を多部制・単位制に吸収していくという議論でいけば慎重にやらなければいけないと思うんですね。定時制というのは基本的に、現状の定時制は学年制を取っているわけです。従って1年で入学した子、もちろん場合によっては全日制で、例えば20数単位取っていて、この子は2年に編入、転入という形でもって2年生に入ってくるというのがあるんですが、単位制の場合には、例えば17年度入学生というのが単位制なんですよ。その子が3年間で卒業するのか、4年間で卒業するのか、いや8年かけて卒業するのかということは、その子の計画によるものだと思います。

従って松工の定時制は今、学年制を取っているということと、多部制・単位制になっていく松本筑摩が定時制、学年制を取った定時制の松本工業が取って代われるかということと必ずしもそうではないと思います。

というのは、単位制というのは資料にもあったように、自分で取りたい科目を選んで、僕は4年間で卒業するとか、3年間で卒業する、従って1年のときには無理してでも毎日6

時間取って、2年目はこれだけ取って、3年目のときには午前の部だけでもって74にそろえていけばいいというように、かなり自分で主体的に、目標を持って、あるいは意欲的に科目選択をしながら、卒業を目指すわけです。

ところが現時点の定時制の生徒の中には、かなり教師の指導だとか、仲間の激励だとかがないとなかなか授業についてこれなかったり、卒業を目指さないという子もいるんですよね。そうすると、1年生としてクラスを持って、学級担任が家庭訪問をしたり、あるいは懇談をしながら、何とか2年生のなるように頑張らなさいというようなことで、手を引っ張ったり、お尻を押したりしながら学年を上げていって4年間で卒業する生徒も少なくないんです。そういう子どもが多部制・単位制に行ったときに、自主的、主体的に科目を選択して3年なり、4年なりで卒業できるような状況にあるかっていうと必ずしもそうではないと思います。だから多部制・単位制を設置したから、現状なら夜間定時制はいらないということには即ならないということだと思います。

（中條委員長）

資料6で、例えば今の鈴木委員のご発言に関していえば、ガイダンスの充実により、一人ひとりの学習計画を支援しますとか、少人数の授業で基礎をしっかりと学べますというように、文言的には書き方がされていますが、今のご発言とここに書かれた内容を踏まえて、どんなふうにイメージとして考えて、もしくはとらえていらっしゃるのか、先ほどの課題、もしくは問題指摘に対してはいかがでしょう。

（柳澤教育主幹）

学年制と単位制の違いについて、今のお話のようでありますけれども、学年制の場合のデメリットといいますか、もう1年留年をしてやらなければならないという、自分の取った単位が無駄になるというような部分もございまして、取った単位がそのまま生きるという単位制のよさということがございます。

そして今、委員長さんがおっしゃいましたけれど、ガイダンス機能の充実ということで、これは多部制・単位制に限らず、総合学科も基本的には全国的に総合学科はすべて単位制を取っているわけでありまして、総合学科につきましてもこのガイダンス機能というのは大変重要視されているということでございます。

今の松本筑摩高校も単位制で、午前、夜間と、先ほどお話がありますように2部制を取っておりますが、この場合も当然担任というのがありまして、現在松本筑摩は大体20人規模の学級集団で、担任が付いているというようなことになっております。そして一応持ち単位、例えば1単位から10単位までのグループ、20単位から40単位までのグループとか、その自分の持ち単位に応じたグループ集団でホームルームを運営しているということで、今日お出した資料6のQ & Aの中に、「クラスやホームルームがありますか」というのがありますが、基本的には担任が付いて生徒指導も行っているということになっております。そういう面では今の鈴木先生のご指摘の部分については、生徒が自分の自主性がないとやっていたいけないのかということではなくて、そういった適切な指導をしていくことが必要だということでございます。

それから多部制・単位制が現在4校ということをお願いしてありまして、4校長野県に

設置したから、ほかのすべての定時制を全部なくすということではございませんで、やはりそれぞれの地域的な問題や、勤労青少年のための通学の利便性だということも十分配慮しながらやっていく必要があるということは、当然のことだろうと思っています。

また、定時制が統合してできる空いた教室にも、必要に応じては居場所としての相談室とか学習室とか、そういうようなことも、これは最初るとき 2 回目でしたか、定時制の再編整備についての基本的な考え方の中にもあったかと思いますが、そういった配慮も必要に応じてしていくことがあるかと思っています。

（長谷川委員）

話が前に戻ってしまうのですが、改めて確認で伺いたいのですが、先ほど鈴木先生からお話ししてもらったとおりで、11 通に関して生徒数が減らない中で、平成 19 年度から、この計画を実施ということになった多部制・単位制に筑摩が移行するとして、明らかに普通学級を希望している生徒が変わらなかったとしてですから、3 クラス分はどこかで欠けるか、増やすかという部分については、増やす可能性はあるのか。それとも増やさないで、このままのクラスでいくのかというのを伺いたいのですが。

（柳澤教育主幹）

先ほど、課長のほうからお答えさせていただきましたように、この通学区全体の中で生徒の卒業生の動向を見ながら、募集定員というのは毎年決定をしていくわけでありますので、進路先がなくなってしまうということがないように、この通学区の中できちっと定員を確保していくということになるかと思っています。

（長谷川委員）

2 点目ですが、この表全体の動向を見たときに、やはり生徒減が激しいところと、生徒減があまりなくて逆に増える可能性がある時期があったりとか、それぞれ地区ごとの特色はかなり違うと思います。

個人的なイメージだと、県教委の今後の実施計画というのは、例えば何年後にはこれだけのデータが予想されるから、この時期にはこれだけある程度高校数については考えなければいけないとか、そういうことを含んでいくのかなと思っていましたが、そういうことではなく、とにかく 19 年度から高校再編成についてはこのようにきちとしてやってしまうということなのでしょう。

（中條委員長）

お願いします。

（柳澤教育主幹）

最終報告書が、もしお手元にございましたら 18 ページを開けていただきたいと思います。その 18 ページの下のところ、中学校の卒業生数と 1 校あたり平均学級数の推移というグラフがございます。

折れ線グラフが、その年度ごとの 1 学年の平均学級数が出ております。ご覧いただきま



して分かりますように、平成 2 年が 7.21 とピークになっておりまして、平成 17 年が平均学級数 5 を切っております。このままの推移でいきますと、平成 31 年度で 4.17 という数字になるわけですが、この最終報告書で述べられていますように、そこに 5 から 6 のところが薄く色塗りになっておりますが、5.5 学級、この数値を使いまして、目安としての 76 校と、公立 76 校ということで総数の基準が示されたわけでございます。

それは毎年毎年、その真ん中のラインが 76 校の平均の学級数になっておりまして、これは毎年毎年生徒数が増減しますから、違うわけでございます。

しかし今年は 75 校で、来年 76 校、その次は 74 校と、こういうわけにはまいりませんので、やはり長期的な動向を見まして、平成 31 年までをターゲットにしながら、その間に 76 校が適切であろうと、こういうことになるかと思えます。

1 校建てますと 60 年もつということになりますから、設備投資等を考えますと、やはり長期的な議論で考えなければいけないということだろうと思えます。

(中條委員長)

鈴木委員のご質問はいいですか。

(鈴木委員)

全く答えになっていません。

筑摩がなくなると、この 11 通は 11 校ですよ。そうすると 70 を割ると平均学級数は 6 点幾つでしょう。

筑摩が多部制・単位制高校になれば、11 ですよ。

(柳澤教育主幹)

12 です。

(鈴木委員)

12 ですか。

19 年度から、計画とおりスポンと入れてしまうと、梓川のような、4 学級規模の学校があるため、どうしても松本の市内校は、現在 8 のところが 9 になったり、4 のところが 7 になったりというふうにせざるを得ない状況になるんですよ。

だけど 31 年度というのを見たときに 80 名、17 年度から見たら減っていますから、だから 40 人分はどこかで切り捨てればいいということになります。むしろ増える年もあるでしょう。そうすると、ちょっと 19 年度に一律にポンと実施するというのは、無理があるんです。

他通学区、1 とか 2 とか 3、他通学区ではすぐにでもやらなければというところがあるかもしれないけど、ここで特に 11 通のところで見ると、今言った筑摩を 3 学級ポンと削るということだけを見てしまうと、11 通の範囲でいえば、無理があるんです。

76 の問題ではなくて、この第 4 通から見ればね。

(柳澤教育主幹)

第11区で見ますと、ちょっとその表の中では分かりにくいと思いますが、割り算をしていただければ出るわけです。

平成16年で見ますと13校ございまして、平均学級数でいいますと1学年5.62学級となります。これがこのまま推移しますと、平成31年5.15学級というふうになりますが、確かにこの11区は、今後はこれからも減少が少ない地域かというふうに思いますが、平成31年で12校になりましたときは5.58学級ということになります。

この11区全体の募集定員を考えたときに、恐らく今後12というお話がありましたけど、9学級という数字は恐らくないだろうというふうに思います。現在松本深志が8学級で1校ございまして、8学級のところまでかなというふうに考えています。

(中條委員長)

それでは、休憩します。

今12分ぐらいだと思いますので、10分間として、25分から再開します。よろしくお願いします。

【休憩後再開】

(中條委員長)

それでは、時間になりましたので、再開させていただきます。

議論の再開の前に、先ほど私が質問した池工の定時制は今、普通科になっていますが、その経緯を調べていただいたようですので、結果を掛川主査のほうからお願いいたします。

(掛川主査)

先ほどお話がありました池田工業高校定時制でございますが、昭和23年5月に現在の池田工業高校である北安曇農業高校の中に定時制が設置されました。その時点から普通科でスタートしております。

その後分校を2、3設置していますが、それら分校につきましても普通科ということで、その後、中心校である当時の北安曇農業高校内の定時制の普通科に統合されていったということで、農業科および工業科の定時制課程はありませんでした。以上です。

(中條委員長)

ありがとうございました。

では、全日制のほうの学科の編成はあったにせよ、定時制については最初から現在に至るまで普通科ということですね。ありがとうございました。

それでは議論を戻しますが、先ほどの議論は多部制ないしは単位制そのものの議論というよりは、むしろ学級数、それからある意味それをベースにした学校数につながっていく議論ですし、多部制・単位制の扱いによってという意味では、11区にフォーカスが当たっておりますが、先ほどの平成31年に至る過程うんぬんというところの議論は、必ずしも

11 区だけではなく、10 区および 12 区においても、同様のことは出てまいりますので、前回第 4 回の中で、具体名は別として、そこに至る過程の検証というのを次回以降するということで、お互い確認されております。従って、それに絡めて学級数をどう扱うとか、減った分はどうするのだとか、31 年ベースになっているけれども 10、11、12、現通学区、それぞれその間増えたりする分は「いったいどうするのだ」ということについては、次回以降の議論の中に集約させていただきたいと思います。

いったん多部制・単位制そのものを、仮に多部制・単位制を設置しなければどうなるかという議論があり得るのかもしれませんが、多部制・単位制そのものをどうするかという議論でいったん続けさせていただいて、もしどうしても数の絡みで検討せざるを得ないということであれば、次回以降の中でもう 1 回学科の設置の中に絡めて議論をしたいと思います。

従いまして、多部制・単位制そのものの必要性ないしは、先ほど言いました定時制のある意味統合ということも絡めてのご意見がもしあれば伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

（丸山委員）

ちょっとその前に、最初の前提だけ確認でよろしいですか。

多部制・単位制で筑摩高校をつくるときに、先ほど問題がありました、今の全日制普通科の併設は無理だ、難しい、そここのところは「こういうことで難しい、無理だ」、逆に言うとも「こういう条件が許せば、何らかのものがあるならば」今の普通科も存続できるのかどうか、そここのところだけ教えていただきたいと思います。

（中條委員長）

事務局お願いします。

（吉江高校教育課長）

ほかの地域からも若干そういうようなお話は出ていますが、基本的に現実味があるなしの議論はさておかせていただきまして、現実味の議論を申し上げますと、基本的には多部制・単位制というのは朝から夜まで授業がございます。

朝から夜までである授業の場合に、併設する全日制との関係で申し上げますと、使う施設の共有の問題とか、いろいろな問題が出てまいりますから、例えば筑摩みたいな極めて小さいクラス数の全日制がある場合は、何とか回せるかもしれませんが、また筑摩の場合は母体が定時制ということでスタートしたというような、いわゆるそういう意味での学校であったという意味合いから、可能な面があるかと思います。

現在の全日制のところへ設置する場合に、直ちに簡単にできるかというのは、それは現実的には難しい面があると思います。

ただそれは取りあえず事務的なお話でございまして、それをさておいて申し上げますと、私もまずはちょっといろいろな数字があると難しいので 90 校という、いわゆる長野市立の皐月高校を含めての 89 校 + 1 校の 90 校という学校を、75 校 + 1 校というような位置付けの全日制の学校にまずして、それによって適正規模を図ろうと前提で考えています。

その上でまずは 14 校というような数字が出て、その 14 校の中でいわゆる多部制・単位制という意味合いの独立校として 4 校を設置してはいかがかというようなことで、提案した経過がございます。

その提案の筋から考えた場合に、現状において私どもは全日制と多部制・単位制の併設校というようなものを設置するという前提に立っていないということでご理解いただきたいと思います。

（中條委員長）

丸山委員いかがですか。よろしいですか。

（丸山委員）

はい。

（中條委員長）

ほかにご意見はありますか。

（今井委員）

ちょっとよく分からないところがありますが、多部制・単位制という言葉はバラではないんですね。

多部制という制度と単位制というのは、ひとつの選択肢という意味合いではないですね。

（吉江高校教育課長）

結果的に、午前部、午後部、夜間部というのを多部にした場合に、これを学年進行のような形にしますと、恐らくは 4 年制じゃないと卒業できない、4 年間じゃないと卒業できないとか、そういうような選択肢がなくなってしまうということです。

ですから結果的に多部にした場合は、その内容で 3 修制、いわゆる 3 年目に卒業できるというような利点も加えて考えると、どうしても単位制という位置付けにせざると得ないという現状であろうかと考えています。

（今井委員）

ですからこの 3 つの部、プラス通信課程も含めれば 4 つのどこかに本籍は置かなければいけないという意味合いでよろしいですか。

（吉江高校教育課長）

はい。

( 今井委員 )

卒業条件として、単位制によってある一定の単位まで行けば、卒業証書が授与されるという考え方ですね。

( 吉江高校教育課長 )

それについて申し上げますと、資料 6 の 2 ページ、裏側をご覧くださいと思います。

基本的に例えばの話が、この時間割をご覧くださいますように、午前部の生徒は、まず午前部を主体として位置付けます。それで午前部のほうで授業を学びつつ、ある程度短期間に、あるいは 74 単位以上取ればそれでいいわけですから、好きな教科を午後部、夜間部の中でさらに履修をすることによりまして、最短で 3 力年で卒業できるということです。

あるいはその次に午後部の生徒の例がございますが、その午後部の生徒は真ん中の午後部を母体として、両方の分野の好きな科目を選べる。ですから基本的には午前部の生徒の場合は、午前部に必須科目が基本的に、集中的に入っているわけです。

それで選択科目は、午後、夜間部で取りやすいような形で編成されているというようなことをご理解いただきたいと思います。

( 今井委員 )

学生の立場というか位置付けは、今の説明で分かりました。これを今度教える側の体制というのは、どういう形になるのですか。先生の配置などはどうなるのでしょうか。

( 吉江高校教育課長 )

基本的に今、定時制の先生というのは午後からの勤務になっております。午後から夜までの勤務ということになっておりまして、そういう意味で先生の形態というのは、午前から基本的に午後の 5 時ぐらいまでの勤務形態の先生と、それから 1 時ぐらいから夜の 9 時ぐらいまでの勤務形態の先生と、そういうような形になろうかと思っています。

それで状況の中で、例えば塩尻の志学館高校の場合には、ある程度選択科目を広げる中で、外部講師等を活用しているわけですが、カリキュラムを組む中では、そういうような先生方の活用というようなことも、今後は出て来ようかと思っている次第です。

( 今井委員 )

そうすると必然的に、教えるほうの体制としては、ここでのいう午後部がかなり膨らむということですね。

( 吉江高校教育課長 )

そうですね。

( 今井委員 )

そういう体制になりますと、結局は生徒の各午前部、午後部、夜間部という 3 つの部で見た場合に、いわゆる項目の割り付けが多くなるという運用になるわけですね。

(吉江高校教育課長)

今申し上げましたように、午後部には基本的に必修科目と選択科目が相一緒になるような形になるかと思います。ですから基本的には午後のほうが、比重が濃くなるというような面はあろうかと思っていますが、ただひとつの学校が今後立ち上がりまして、それである程度年数を重ねてくる中で、例えばの話が午前の生徒さんが多いとか、あるいは午後の生徒さんが多い、はたまた夜間のほうが多いということで、その学校におきまして、多部制の生徒さんのそれぞれの比重が変わってくることも考えられます。

それによって先生も当然カリキュラムを組む中で、例えばの話が必ずしもどの学校も同じ比率で、先ほど申し上げましたように8時半からの勤務の先生と、午後1時からの勤務の先生が同比率であるというようなことには、今後はならない可能性はあると考えている次第です。

(中條委員長)

はい、ほかはよろしいですか。

この多部制・単位制高校というのは、教える中身は別として、子どもたちのライフプランというか、そういった生活パターンが朝から夕方までという単一ではなくて、午後から、もしくは夜中心にということに合わせていくというのが一番の目的であるという理解でよろしいですね。

ほかにございますか。

(鈴木委員)

今日配られた資料にもあるように、現在の定時制の募集定員、入学者数、在籍者数というところなのですが、松本筑摩の普通科定時制課程については80人募集でもって目いっぱい80人入学しているんですね。もちろんこの80人というのは、いわゆる1年生ということではなくて、場合によっては2年次該当の生徒などもありましたら82ということにもなるのですが、在籍者数を見るとほぼ3倍ですから、かなりの生徒が3年で卒業していく力を持った生徒が毎年80人入学してきていて、大体同じぐらいの人数が卒業していくということで、240人前後の生徒が在籍していると、こういうふうに見ていいと思うんです。そうすると、恐らくこの80人ピッタリではなくて、これ以上の応募がある。要するに不合格になる生徒がいると思います。そういうことでいえば、かなりのニーズが高いということで、こういうシステムを松本筑摩に入れるということはいいいのではないかと思います。

ついては、先ほどの資料6にもあったように、私は午後部に所属するんだけど、午前の部も朝の11時ぐらいに登校し、夕方の4時まで授業を受けるとか、場合によっては私は、2時間目は空き時間になるというようなことがあるとすると、1時間目から6時間目まで全部授業をやっている全日制の課程の生徒と、そこで一緒になって活動していくということには、やっぱりいろいろな無理があるかなと思います。この子は実際に、変な話ですがサボっているわけじゃなくて、3時間目の時間帯は授業のない子だというような、そういうことでいうと多部制・単位制というひとつの学校が独立であるということのほうが望ましいかと思うんです。ただそのときのいろいろな生徒の指導については、他県ではほとんど

コンピューター導入をしています。教室に入って、コンピューターにカードが何か入れるらしいのですが、それで出席のチェックができる。長野県は、そのシステムがないということなので、松本筑摩の先生は現状でも手いっぱいだと言っていますから、そういうことでいうと、多部制といっても2部制、午前部と夜間部。それで先ほど今井委員が言われたように、午後部に当たるところは午前部の子が3年卒業のために受ける特別講座、あるいは夜間部に属する子が、週3日ぐらいは午後の部に出られるからというので3年卒業を目指す、いわばクッション的なシステムにして2部制の単位制という形が、私はいいのかなと思います。

そのときに、今言った全日制をどうするかということですが、私の意見で言えば、これも第1回目に出ていたところですが、実は12通の生徒が11通に200名流れてきているんですね。大体12通については、対象者数に対して大体7掛けの募集定員しか持っていないんです。要するに大町の地域は、大体卒業生に対して7割定員なんです。3割は、大体11通に流れることを予測しているんですね。流れているからそうやってきたのか、あるいはそういう募集定員だったから流れたのか分かりませんが、その中でもう少し12通の募集定員を増やすことによって、全日制筑摩の普通科志望者の120人分を12通に付けると。

12通は普通科の場合に大町北が3で、大町高校が普通科3、理数科1という形で4ですから、一定の余地があるということであれば、候補案にあるような大町北と大町高校の合併というようなことも少し再検討しながら、12通に少し増やして、12通の生徒が12通で学習できるような学校づくりを12通の学校でもらうということであれば、松本筑摩の3学級減というのは、第4通全体であれば、あるいは大系線沿線ということであれば、吸収できるのかなと思います。

（中條委員長）

はい、後半の部分は次回以降で各区ごとの中に引き継いで議論させていただきます。

今、鈴木委員がおっしゃった中で、多部制を先行している他県は、出席とかカリキュラムの登録だ、受講だみたいなことも含めて、システムで対応していることによって、3部制を維持できている部分があり、もし仮にそういったシステム導入が長野県は難しければ、午前と午後で、もしくは午後から夜間でという、2部制のほうが現実的にはいいのではないかというご意見がありましたが、必要なものはお金をかけると、確か吉江課長さんが2回目か3回目におっしゃられたのですが、それが前提だからやらせるというものの理解でなくてもよろしいですね。

（吉江高校教育課長）

例えば、塩尻志学館高校のような総合学科高校においてもよその県の場合に、クラスルーム制がないところがございます。ある意味で、鈴木委員さんがおっしゃられたような、タイムレコーダー的なものの管理によってやっている部分もございまして、これの良しあしというような議論も実のところはございます。

生徒は、やっぱりある程度クラスルーム的な要素があって、いわゆる集合としての一員という意識がないと、かえって学校へ来るという意識が薄れてしまう。

あるいは非常に生活パターンがルーズになってしまうので、むしろそれがいい悪いとい

う議論の中で、取りあえずタイムレコーダーというようなものを入れることによって、意味があるということであれば、それは当然ながら必要な経費ということで考えていきたいと思えます。

ひとつの学校運営、あるいは生徒指導とかの中で見た場合に、むしろそういうやり方ではなくて、クラスルーム的な要素の中での生徒活動等が、より適当であるということであれば、そっちのほうがいいのかもしれない。

ただ多部制の議論で申し上げますと、一応私どもは実は平成 14 年度において、多部制・単位制の検討委員会というもののの中で、長野県においての多部制・単位制は、午前、午後、夜間部の 3 部制がいいんじゃないかというご提案をいただいた経過はあります。

しかしながらその報告書の中にも、必要に応じて 2 部制でもいいんじゃないかということの中で、確かによその県の場合にまさしく委員さんがおっしゃるように、昼間部、夜間部というような位置付けのところもございますので、そこら辺についてはどんな形態が一番いいのか、それでまたさらに申し上げますとでき得れば私どもは多部制・単位制の学校には、今後生涯学習的な要素も入れていきたいと思っております。

そういうようなことで、一般の社会人の方も、学べるような要素も入れていく意味からの、どんな多部、いわゆる 2 部がいいのか、3 部がいいのかというようなことは、またご議論いただければと思っております。

（中條委員長）

はい。鈴木委員がおっしゃったのは、タイムレコーダー管理でクラスルームはやらなくていいということではなくて、むしろ受講数なり、カリキュラムなり、進捗管理なりを、システム化によって工夫することによって、という理解でいいですか。そうじゃない。

（鈴木委員）

生徒指導関係で、ということですね。

（中條委員長）

はい。神澤委員さん、そんなに大したシステムじゃないですよ。今、聞いた中では、では、必要ならけていただくということでお願いします。

ほかに多部制・単位制で何かご意見がございましたら。いかがでしょうか。

設置については、先ほど鈴木委員なり今井委員のほうから、その特徴を踏まえて、現状も筑摩をベースにしたときに、あったほうがいいんじゃないかというご意見がございましたが、逆になくても今のままのほうがいいんじゃないかとか、まだ時期が早いんじゃないかとか、何かご意見はほかにありますか。

特によろしいですか。

はい、それでは時間の関係もありますし、終了が 5 時予定になっています。いったん学級数の関係は次回以降に回す前提で、どの学校という学校名もいったんは議論のほうに任せることにして、一応今のところは筑摩を前提にという案になっているわけですが、多部制・単位制については、いったん導入を前提に今後さらに検討を進めるという前提で、今回は進めてまいります。



続いて総合学科、第4通学区では第1回のこの委員会の中でも、第4通学区に関しては既に塩尻志学館に設置がされ、かつ今日の追加資料等もございましたが、評価、成果なりもあり、また小口委員のほうからも、その学校の所在する地域から見ても、そういったことは言えるのではないかというご発言もあったように記憶しております。そういう前提の中で、例えば原案ではそれぞれ4地区1校ずつになっていますが、ライフプランに合わせるという先ほどの多部制・単位制なり、それから子どもたちの選択肢の幅を広げてあげるという意味でも本人次第といったときに、志学館はいったん既設という意味ではありますけれども、さらにそれを拡大させていく意味でのご意見等もございましたら、お願いいたします。もしくは、批点があれば、昔のほうがよかったということで、昔に戻せというご意見があれば、それも含めて何かご意見があればいただきたいと思います。

（今井委員）

いろいろ志学館の資料を見せていただいて、確かに総合学科に移行したことによって、かなり効果が出ているというふうに見えます。もう一方で、大系線沿線というところを考えた場合、南安曇農業高校があって、すぐ隣の駅のそばに穂高商業高校がある。さらに池田にすぐまた工業高校があるというようなところで、この職業科の学校が何か偏っていると言えは変ですが、ちょっと偏りが大きいかなと思います。そのところ、3校のところですね、そういったひとつの総合学科というような編成替えというのはできないものかなと。志学館であれだけ顕著に数字を見ても変化がありますので、そういうところが期待できれば、ちょっとそこら辺の3校、あるいは豊科高校まで入れると4校のところを、再編案というものを、総合学科制を導入することによってどういうふうになるのかなというようなものも、検討するのがいいかなというふうに思います。

（中條委員長）

はい、今のご意見について何かございますか。

今の今井委員のご発言で、塩尻志学館の成果とかは置いておいて、実業系、例えば農業なり、商業なり、それから池田にあります工業なり、それから普通科なりと、それぞれの選択肢としては、入り口の選択ではありますけれども、あるものをまとめるメリットというものは、どんなイメージをされていらっしゃるでしょうか。

（今井委員）

メリットといいますか、これは私の勝手な推理ですが特に今は農業高校で、それだけでたぶん将来を考えていくという子はいないと思うんです。やっぱりそこにある程度農業高校が近くにあるとか、さまざまな家が結構農業をやっているから農業科へ行きましょうという感じの動機の子が多いかなと思います。

そういう前提に立ったときに、やはりそこに商業科のことが学べるとか、場合によっては理系の科目もかなり力を入れようと思ったら取れるというような選択肢が広がれば、ちょっと本来その学生の将来のキャリアプランがより豊かなものができるようになるのかなという思いがします。

(中條委員長)

入り口の選択ではなくて、入った後出るまでの間の複数の選択制という意味であってもいいだろうというご意見ですね。

はい。ほかに3部制を入れる意見を含めて、ほかにどなたかご意見はございますか。

百瀬副委員長、教育者の立場で、塩尻志学館で前と今と比べたときに、生徒さんにとっても保護者でも先生方にとっても何でもいいんですが、一番何が良くなったとはたから見えて思われますか。

(百瀬副委員長)

私は今、塩尻市の教育委員会ということで、高等学校の関係のことまではちょっとやっていないので…。

(中條委員長)

すみません、時間的に近いところで。

(百瀬副委員長)

はたで見えてと言われても、見えにくいものですから申し訳ないです。

(中條委員長)

はい、ありがとうございました。

ほかにご意見ございますか。先ほどのご意見は、通学というと語弊があるかもしれませんが、今塩尻にあり、それから北の北安まで行くかどうかは別にして、そのあたりにもおのおの北安あたりにそういう選択の幅がもうひとつあってもいいのではないかということで、いったん北のほうに行ったのですが、南のほうはそういうニーズってありますか。

(宮川委員)

私は、何年前に志学館に総合学科できるときに、蘇南高校に総合学科を導入していたきたいという運動をやった者ですので、かなり言いたいこともあるんですが、ただ蘇南高校自身の生徒の数も減ってくる、それから岐阜県からもたくさん来ていただいている。ああいうところですから競争心はあまりない。いろいろなところで、そういう総合学科的なものを導入して、魅力のある学校づくりをやろうよという話だったのですが、運動をした結果塩尻のほうへ行ってしまった。

いまさら仕方がないことですが、今度のことで今、今井さんが言われたことを聞きますと、木曽高は全て普通科の学級です。山林には職業科があるってことですから、もしそういう形で、そこを総合学科的な、あるいはジョイント的な、そういう見方をすれば、例えば今山林のインテリア学科へ行っている子どもたちが、1年通ってみたけどどうしても普通科の子と授業を受けたいという、あるいはそういうのを選択できるよと。また大学にも行ってみたくなると、そういう場合には非常に効果があるかなと思います。

蘇南をそこにくっつけるというと、それは大変な距離がありますので難しいと思いますが、蘇南の場合はここに鈴木先生がおられますが、総合選択制と言いまして、商業科にい

ても大学へ行きたいと言えば、普通科の科目が受けられるとか、電気科でも、じゃあ英語を一生懸命やろうよというのは、その選択制になっていますから、いわゆるミニ総合学科的なところがあるのですが、そういう面と言えばそういう発想は、木曽でも取れるかもしれませんということです。

（中條委員長）

通学的に見たときに、先ほど学級だとか学年制、そういうものは次回に回すとして、鈴木委員がおっしゃられたように、12区というのは南へかなり出ていく生徒がいるんですけども、中間部はほとんどその中に完結している。中学別に見ていっても、必ずしも南木曽町周辺だけではなくて、木曽には確か10校中学があったと思いますが、例えば木曽北部からも蘇南に来ているお子さんもいますよね。

そういう中で、今、鈴木委員がいらっしゃいますが、蘇南にミニ総合学科的な、総合選択制ということでやってもらったときに、必ずしもその通学区の中間部にいなければいけないということではない。木曽福島にいたなくても、南木曽でも木曽エリアということを見たときに、総合学科的なものがあれば、それはエリアとしては対応が付けられるのですね。

（宮川委員）

私どものほうから、今、木曽高へ通う子どもたちも結構います。ただ木祖村とか、あちらからは11区へ入れてしまう問題もありまして、岐阜県へ行く子どもも確かに多いんですけど、岐阜県の子どもは大桑以南ですね。

ですからそういう見方で見れば、木曽もひとつの形で取られると思いますが、実はそうかといかない部分もありまして、もし蘇南のほうへそういう形で引っ張れば、木曽福島からかなりの数の生徒が塩尻、あるいは松本へ流れていくんじゃないかと思います。

そういうものを蘇南へ来るといえるか、中間的に置いて岐阜県からも来ていただけるものとあってもいいかもしれませんが、今の形といたしましてはそうではなくて、福島、木曽に2校、3校というか拠点がある形がいいんじゃないかなと思っています。

私は何回も言わせてもらいましたが、魅力ある学校というのは学級数は少なくても、そこへ行ったらそれなりの選択が取れるということがひとつあるんで、それをどのように伸ばしていくかということだと思っています。

今、私どもは山口村が岐阜県へ行ったものですから、中津川市とも同じ協力関係といたしますが、蘇南高校の体制の中へ入っていただいて、こちらからも出ていく子どもはいますし、向こうから来ていただく子どももいるんで、そういう面も魅力ある学校づくりというのをもまた今提案しております。

私は木曽のことしかよく分からないもので。

（中條委員長）

いえ、分かっていらっしゃるところでお聞きしたかったものですから。実際は通学となったときに、鈴木委員、蘇南は北はどの辺から通ってこられているんですか。

(鈴木委員)

木曽から、藪原から。

(中條委員長)

日義中学からも、来られていますか。

(鈴木委員)

来ています。今年は三岳村からも来ていますね。

(中條委員長)

一番北の中学はどこになるんですか。

(鈴木委員)

木祖村にある木祖中です。

(中條委員長)

はい。そこからも一応通学は可能で来ていらっしゃる。

(鈴木委員)

はい。大変ですけど、来ています。

(中條委員長)

ほかの旧通学区関せずではなく、例えば大北地区、先ほど今井委員から意見をいただきましたが、大北地区での総合学科もしくはミニ総合学科といってもいいかもしれませんが、その体制について下川委員、個人の意見で結構ですが、その辺はいかがお考えでいらっしゃいますか。

(下川委員)

具体的には、ちょっと細かいことは理解できていないので、うまく言えませんが、前回も申し上げたように白馬、大北の部分で、佐久長聖や長野日大とか、そういったところへも流れておりますし。現状大北エリアという中で必要かどうかということはちょっと個人的には何とも言えません。

(中條委員長)

ありがとうございました。

では、ほかの方、何かご意見はありますか。

総合学科をイメージしたときに、第3回あたりでご説明いただいておりますが、蘇南の取り組みというのは、総合選択制という名前は聞いていますが、単位制かどうかは別にして、総合学制的な取り組みといえますか、そういうイメージで我々は見ているのでしょうか。

(鈴木委員)

それでいいかなと思います。

ただ、総合選択制と総合学科との違いは、総合学科でもしガイダンスをきちんとやらないと、本当にバイキングでいえば、私は胃が弱いから野菜だけ食べようということになっちゃうんですね。大事なタンパク質を取らないということになっちゃうんです。

ただ総合選択制は、商業科、電気科、普通科は、必ずこれだけは取りなさいという科目があって、2年生さらに3年の少し多い時間帯に、商業科の子が普通科に乗り入れたり、普通科の子が電気科に乗り入れたり、そういうことをやっているの、総合学科ということで見た場合に、ガイダンス機能をきちんとした総合学科が総合選択制というようなことになるのかなと思いますね。

(中條委員長)

総合学科の場合は、いろいろな学科がありますから、例えば自分の意思として2年目なり、3年目なりに、職業系のほうの選択を増やそうとか、逆に上位校へ行きたいので普通系の単位を増やそうとかという選択ができますよね。

蘇南というか、工業科の場合、電気科の場合とか、商業科の生徒さんが学年途中で普通科の単位を増やしていくとか、そういうことは可能ですか。

(鈴木委員)

商業科という卒業資格を得るためには、商業科の指定された専門科目を最低でも20単位取らなければいけない。読み替えなんかもやった場合でも、最低でも20単位以上取らなければいけないんですね。かつては25とか30という枠があったのですが、今は減ってきました。基本的にまずそういうハードルがあるということと、学校の教育課程上商業科は何単位まで、電気科は何単位取りなさいという必須指定をしているということで、途中で進路が変わったからということで、指定された科目をやめて取りに行くということとはできません。

教育課程上、柔軟な部分は一定枠は持っていますが、そうでないところもガードされている部分もあります。

(中條委員長)

仮に蘇南じゃなくても本当はいいんですが、一番分かりやすいのと鈴木委員がいらしたので、例にして。では蘇南が総合選択制ではなくて、総合学科にしたときの弊害はございますか。

(鈴木委員)

総合学科というのは今度の志学館の場合には農業科、家政科を母体にしてできているということで、一定の総合学科といっても何でもOKではないんですね。やっぱりイメージとして何らかの科はあって、それを選択してきているかどうかという問題ですが、中学生のイメージでは何でもあるという学校に見えているようなんです。

私は中学校の地区PTAに出て、「どういう学校へ行きたいんですか」、「私の娘はトリマ

ーになりたいので、塩尻志学館です」と、こう言うんですね。「違うだろうな」と思いますが、要するに総合学科はオールマイティ的な観を持っているというのは実態だと思います。

でも総合学科そのものは、さっきも言いましたが場合によってはきちんとしたガイダンスがないと、あるいは中学校での進路ガイダンスでも同じだと思います。あるいは入学したときの進路ガイダンスでも全部同じだと思いますが、そうでないと3年間場合によっては何をやっていったのかなということになるのではないかと思います。

私の全く個人的な感想ですが、志学館がとても評判がいいのは、240人の定員に対してかなりの応募があるんです。不合格者もたくさん出ます。言い方は適切かどうか不安ですが、一定の学力を持った水準の子が、今、志学館に入ってきているという実態の中で、意欲もあるだろうし一定の学力もあるだろうしということで、うまく回っているのではないかと思います。

それを例えばこの第4通学区に、2つに一度増やして建てた場合に、はたしてそういう形になるのかなというのは、やっぱり心配になりますね。

(中條委員長)

総合学科の設置基準みたいなものというのはあるんですか。

例えばその学校が持っている歴史、経過の中で、例えば塩尻だったら一応総合学科になったとかという雰囲気の中で、そういう分も含めて積み上げているとしたときに、違う学校はやっぱり違う学校もそういう点を踏まえての学科編成を前提にするのか、はたまた先ほど今井委員がおっしゃられたように商業もあれば、農業もあれば、工業もあれば、そういう学校がその地域にあったときに、それをまとめると、それぞれまとめるような形になれば、全く違って普通科の上に少しずつ取り込むようなイメージになるのか、その辺の基準とかあるんでしょうか。

(柳澤教育主幹)

全国にもたくさん総合学科ができておりますが、その母体になりますのは、職業高校であったり、あるいはまた普通科の学校が変わっていったりというようなことがございますので、基本的にはどういう系列をつくるかというのは、全く自由といえますが、その地域のニーズや周りの職業科の配置等々を考慮して、この地域であればこういう系列がいいのではないかとということをつくっていくということになりますので、特に総合学科の限られた設置基準というものはございません。

教育課程上の、前にお話がありました「産業社会と人間」と、こういうものは必ず学習しなさいということはありませんけれども、設置基準としては現時点ではございません。

(中條委員長)

普通科が転換していくということも、当然あり得るわけですね。分かりました。

ほかのご意見はございますか。

(鈴木委員)

ちょっと今、私も意見が言い足りないところがひとつあったので。

(中條委員長)

はい、ではお願いします。

(鈴木委員)

蘇南で総合学科といったときに、基本が4学級とか3学級というような学校では、ちょっとできなかったと思います。和歌山高校の先生だったか、もうだいぶ前に新聞に投稿してまして、総合学科等々というのは1,500人の生徒がいるんだと。1,500人という生徒がいて、初めていろいろな科目の教員が集められて、本当に総合学科としての機能が出せるのだという話がされていて、従って志学館は240人×3ですから、1,000人までいかないう規模だと思います。それはやっぱり県の教員配置についての限界があって、商業や福祉などの科目があるのですが、例えば常にそこで商業の勉強が、私は商業の勉強をやりたいと思ったので、2年から商業のほうを専門にやろうとか、福祉をやりたいと思ったので福祉をやろうといっても、やっぱり限界はあるんだと思います。やっぱりその母体になるものが主となるということを理解した上で、中学校での進路指導をしていかないと、ミスマッチが起こってしまうと思います。

(中條委員長)

その辺について、県教委のほうで何かご意見はございますか。

(吉江高校教育課長)

先ほど来申し上げているように、基本的には確かにひとつの細かい基準というものはございませんが、おっしゃられるように規模が大きいほうが、カリキュラム編成上は当然先生も増やせますし、講座数は増やせますのでいい意味での総合学科としての機能は十分果たせるかと思っています。

ただ反面、私どもはイコール6とは必ずしも申し上げませんが、ある程度の学校の適正規模というようなものを考えた場合には、やはり極論を言いますと10クラスもあるような学校編成をして、それが総合学科というような意味の機能はしているものの、生徒を十分な把握ということでの、生徒指導まで含めての十分な対応ができるかというのに対しては疑問があります。

私どもの県が目指すところでいえば、ひとつのモデルとしての志学館高校であろうかと思っています。当然ながら先ほど来お話が出ておりますように、どうしても母体となるものは以前この学校はどういう学校であったかというのは、結果的にはベースになろうかと思っています。

ただしかしながら、それがベースということであれば、全然違う学校にするのが不可能かといえば、それはもちろん可能でございますし、それはそのような対応はできるかと考えております。

またもう1点申し上げますと、ある意味鈴木委員さんがおっしゃった面にイコールの面がありますが、総合学科高校というようなものを非常にいい学校だということで、ひとつの流れとしまして、多数つくろうという県もございます。

極論を言いますと、統合の結果は総合学科というようなことで、あたかもつくろうという県もございますが、私どもはそれぞれの地域に１校ということで取りあえず決めさせていただきましたのも、ある意味やっぱりそれぞれの地域で総合学科が特色を持って運営いただく上には、まずは各地域、通学の可能性も考えまして１校ずつということでスタートしたほうが、よりその学校自体がひとつのいい意味での成功例といえますか、運営が可能ではないかと考えた次第でございますので、その点をご理解いただければと思います。

（中條委員長）

ありがとうございました。

最終報告書の 11 ページに数行ずつで、その前は別に総合学科、多部制・単位制とあって、11 ページからはそれ以外の高校形態についてご説明いただいているのですが、高校でいう総合選択制については先ほど鈴木委員のほうで説明いただいているので、一応理解は間違っていないと思いますが、その下にジョイント高校と書いてありますが、この中でも複数学科を有する場合などは、希望により転科も比較的容易だとか、教科・科目選択幅の拡大やうんぬんといったような近しい書き方をされているわけです。

ジョイント校と総合選択制、総合学科というものを、ここに書いてあるわけですが、区分けをしたときに、例えば選択の幅の違いですとか、例えば普通科と職業校がジョイント校を組んだときの、先ほどの必須単位の中での、選択の幅の上限なり、制限だとかというものは、この形態それぞれ、どういうふうに区別して見ればよろしいのですか。

（柳澤教育主幹）

総合学科と多部制・単位制につきましては、これはニーズが高いし長野県としても設置していく必要があるということで特出しをしたものでございます。11 ページ以下のものについては、これはひとつのアイデアとして検討委員会等でご検討いただいたものが載っているわけですが、総合選択制高校につきましては、先ほどの鈴木委員さんからのご説明のとおりでございます。

ジョイント高校につきましては、そこにありますようにイメージとしては近隣の学校が統合してひとつの学校になるという形の中で、仮にそこに複数学科があれば、その学科の転科というようなこともやりやすくなるような、そういう柔軟性を持たせた効果というようなことでありまして、その根底には検討委員会等の中では多様化、柔軟化というのがひとつのキーワードになっております。

できるだけひとつの学科に入学したら、もうずっとその学科で卒業していく、途中でちょっと「これは学科選択を間違えたかな」というようなところが、なかなか次への柔軟性がないというようなことの議論がございまして、そういう単位の互換制度とか、あるいは転科をやりやすくするとか、そういったことがテーマになって話題に上りまして、そういうことの趣旨も、報告書のここに語られているということでございます。

（中條委員長）

総合選択制に関しては、先ほど鈴木委員からご説明いただいたように、例えば蘇南でいうと普通科、商業科、電気科があって、電気科ないしは商業科は一定の必須、その学科の



中の必須単位があって、それを下回することは許されないと。それを取った上で、例えば普通科のものを取るとか、その歩幅を変えることは許される。

ジョイント高校も、「選択の幅の拡大や」と書いてありますが、これも当然普通科と先ほどの今井委員の案でいえば、例えば商業科と農業科のジョイント高校と仮に組んだとした場合に農業科に籍を置いて、2年生になってから「商業をやりたい」といったときに転科はいいとして、農業科へ籍を置いたままで商業科の単位を取るということは、例えば総合選択制と同じように、枠はとらえなければいけないということですか。

必須科目の単位数というのは、同じ扱いということですか。

（柳澤教育主幹）

総合選択制というイメージは、ひとつの学校の建物の中に、複数の学科が置かれているというようなイメージですが、ジョイント校のイメージは、キャンパスが違うと、そういうところが、近隣が統合して、そういう中に幾つかの学科があるというような場合には、総合選択制と同じように学科の違う授業が受けやすくなると、そういうことがジョイント高校のメリットかと思います。

また実は、先ほどもちょっとお話ししましたが、3組6校で既に学校間連携というのがございまして、今の農業科、商業科の例でいきますと、須坂商業と須坂園芸高校が単位互換といいますが、須坂商業高校の生徒が園芸高校に行って授業を受けて単位を取る。園芸高校の生徒が、商業高校へ行って商業科の単位を取るということをやっております。

また佐久のほうでは、やはり距離の近い岩村田高校と北佐久農業高校、それから南のほうへ行きますと、長姫高校と下伊那農業高校、この3組6校でそういった単位の互換というのは、たくさんの科目ではございませんが、資格取得につながるような授業を、それぞれのところで受けているということがございます。

（中條委員長）

すみません。多様化・柔軟化が検討委員会等の中でもキーワードだというお話の中で、多様化・柔軟化をどの数字をもってというのがあるんですが、要は不等式でその多様化・柔軟化の多いほうから少ないほうへ、高いほうから低いほうへというように、この学校がなっていくと総合学科が一番多様化・柔軟化の幅が広くて、次に何が来て、何が来てというふうに回っていくことはできるんですか。要は制限があるとか、ある一定の幅で認められるとか、聞いていてもよく分からないのですが。総合選択制は、例えば電気科の生徒が普通科の科目を増やしたいときに、転科というのがなければ、電気科は電気科としての必修単位を必ず取った上で、こっちをやることは構わないぞという理解ですが、例えばジョイント校というのは、全く同じなのか。

（吉江高校教育課長）

順番で申し上げますと、雰囲気とすれば仮に総合学科が一番フレキシブルに得られるとした場合に、その次は場合によるとジョイント校かもしれません。それでその県が総合選択制という感じになろうとか思うんですが、ひとつの考え方としまして、今、総合選択制の中には転科というのは前提に置かれていません。しかしながら今回の例えば蘇南高校さ

んの場合でいいますと、ミックスホームルームというやり方でやっております。

言ってしまうと、普通科の生徒さんだけでホームルームを構成しているわけではなくて、ほかの部の生徒も含めてのホームルームをつくっていて、その中で主たるものが普通科であれば、それ以外のところをある程度の制限はあるものの受け入れるというような意味合いの自由度はございます。

ジョイント高校というのは、長野県内には例がないので、これからつくるイメージでございしますが、言ってしまうと大学でいうところのAキャンパスとBキャンパスがあるというイメージを考えていただければいいかと思います。

Aキャンパスに農業高校があつて、Bキャンパスに工業高校があつて、いったんはAキャンパスのほうに入ったものが、やっぱりBキャンパスのほうが私は向いているという場合に、転科ができるという前提で考えたものがジョイント高校です。

当然ながらそのような位置付けですので、ジョイント高校は基本的に距離が近くて、さらに言いますと、総合選択制というような意味合いの、例えばの話が自分が受けたい授業を受けるというようなことで、それぞれのキャンパスを移動するようなことも十分可能な意味合い、さらには先生も含めまして、キャンパスごとを移動することが可能なような位置付けの学校の場合に、そういうようなセットがいいんじゃないかと。ただこのジョイント高校は、先ほども説明の中に述べさせていただきましたが、基本的には統合の一形態という前提で考えております。

ですから、先ほども申し上げましたように、AとBという学校があればAとBをジョイントということで、校地校舎をそのまま残してひとつの学校ということで運用をしたい。その中で今申し上げたような自由度を加えたいというようなことでご理解いただきたいと思います。

(中條委員長)

ありがとうございました。

自由度、選択という意味では、要は転科の自由度であるという理解でいいですね。

(吉江高校教育課長)

はい。

(中條委員長)

ほかにご質問、ご意見ございましたら。

(丸山委員)

私も最初から連携やジョイント校というものを注目していますが、先ほど今井委員さんがおっしゃったとおり、池田、穂高商業のところでの統合学科とおっしゃいましたけど、これはジョイント校もしくは連携校に近いものだなと感じました。イメージとしては信州大学がそれに近く、その高校版に近いようなものが考えられるのかなと考えておりました。いずれにしても、そういうことを進めていくときに、魅力ある高校づくり、高校改革のひとつの大きなこととして、単位制というものがあるのではないかと思います。

単位制というのは自動的に選択幅の拡大になりますので、生徒の意欲向上という面でも非常に効果があるかなと考えております。ですからそんな面での単位制の拡大というのは、大事なポイントになるのかなと思います。

今、高校数を減らすとかそういうことになると、過激なものが出てくるのですが、穏やかに高校を減らしていくひとつの大事なポイントとして選択制やら、単位制の拡大があるわけですね。そういう面での連携とかを増やしていくことが、長い目で見たときに、高校の数を自然に無理なく減らしていける大事なポイントだなと、そんなふうに考えます。ですから単位制や選択幅の拡大ということは、子どもたちにとっても非常に良いことではないか、大事なことかなと思いますので、そんな方向を大事にしていきたいなと考えております。

（中條委員長）

すみません。素人でよく分からないのですが、ジョイント校は先ほどの吉江課長さんのお話だと、ある意味統合の一形態であるというのはちょっと置いておいて、ジョイント校なり連携校なりで、それぞれの関係を深める中で、より穏やかな、将来に向けての急激過激ではない穏やかに減らすための一方策であるというご意見と、単位制というのは具体的にどう結び付くのですか。

（丸山委員）

他高校と行き来したりするには、基本的には単位制が良い。具体的にうまく説明できませんが。

（中條委員長）

すみません。事務局のほうで、その辺をもしご説明いただければと思います。

単位制がないと連携が取れない、ジョイントができないということでもないと思いますが、より単位制を導入することによってジョイント校なり、連携校なりの生徒の行き来だとか、学科選択の需要が高まるという理解でいいですか。

もしくは単位制を制限する理由か何かがありますか。その自主性とか、生徒個人の責任とかガイダンスの必要性だとか、支援の充実が必要だとか、そういうのはちょっと別にして、単位制を導入するためには制限事項なり何なりがあるということはないですか。

（柳澤教育主幹）

特にそういった制限事項はございませんで、例えば最終報告でいいますと、右側のほうにも進学対応型単位制高校とかございますように、いわゆる通常の全日制普通課程の学校を単位制に移行するというような例も、全国的にはございますので特に制限はございません。

ただ単位制の場合になりますと、やはり選択の幅を広げなければいけないということですので、当然そこには人的配置というようなことのプラスということが出てくることはある可能性が高いですが、規制があるとかそういうことではございません。

(中條委員長)

「ミニ」と付けてもいいのかもしれませんが、総合学科ないしは連携、総合選択、ジョイントという、先ほどの事務局のお話ですと、多様化、それから柔軟化というのはキーワードであったと。

検討委員会は、検討が必ずキーワードであったということから、具体的な導入としての提言は、総合学科、多部制・単位制と2つに絞っているわけですが、形態として今後そういった多様化・柔軟化を進めるためのアイデアとしての幾つかの案を挙げていただいているのですが、送り出す側の立場として、こういった形態の魅力があるという前提が先ほどの丸山委員のご意見という理解でいいですか。中学生から見てってという。

(丸山委員)

そうですね。志学館高校へ行った子どもたちに、何が魅力かと聞いたときに、やはり選択制だと、みな答えておりますので、自分で選択をして、自分の意思で高校を決めていく、これは生徒にとって一番大事なことだと思います。

(中條委員長)

それは入り口の段階で選択するのではなく、入った後でもいろいろなコースを、ある意味選択するなら仮でも行けるという、そういう意味での。

(丸山委員)

行っている子どもたちは、多くの子がそういうふうに答えております。

(中條委員長)

そのときに、先ほどもジョイント校・連携校みたいなご意見をベースにしたときに、例えばそうじゃなくて、総合学科というのをもっと増やしたほうがいいということではないんですね。その理由は、先ほどあったような鈴木委員がおっしゃったようなことで、丸山委員も一緒によろしいですか。

長谷川委員は送り出す側から、今のご意見はどのように思われますか。総合学科はもっとあったほうがいいのか、連携校とジョイント校というような形で、子どもたちの選択を増やしていったほうが、送り出す子どもたちを踏まえて、送り出す側からの魅力というのは、子どもたちは感じると思えるのかなと。

(長谷川委員)

私はここが地元ではないので、1回生徒を送り出した経験がある中で感じたのは、やはり塩尻志学館高校に関しては、ある程度のビジョンをしっかりと持っている生徒で、それなりの覚悟があって、中学校でもいろいろな活動を一生懸命やっていて、最終的に将来はどうしたいのかと聞いたときに、ある程度はっきりした自覚を明確に持っている子だと、「スパッと」入っていくところはあったかなという気がします。ですから総合学科の高校で学んでいく過程のひとつとして、自由に自分の必要な単位が得られるということは、非常にメリットが大きいのかなと思います。

同じところになるのですが、反面として、例えば彼らに聞いていると、例えばそれで 4 大に行きたいとか強く思っているかということ、はっきりとそうではありません。例えば極端な例ですが、その子はある程度学力がある子なんだけど、自分はとにかく将来ワイナリーに勤めたいともうはっきり言っていて、だったら明らかに塩尻志学館高校へ体験を積んで、絵に描いたようにはまっているもので、だからそれで間違いはないと。自分の好きな単位だけ、必要な単位をまずしっかり取って勉強はしろよということで、もうスパッと決まっちゃった例なんです。

ですからある程度そこで見極めができていて、その中で選べるシステムというのが、先ほど進学の話にもかかわるのですが、塩尻志学館でこういうことができるということが分かった上で、その道の中で選んでいくということで、はっきり自分の中でビジョンとして持っていることであるということになると、その生徒にとってやっぱりメリットになると思います。

ただあいまいなところで、将来ちょっと学力も心配なので進学校へ行けるかなと不安を感じていたり、自分は将来何をするのか、自分のビジョンが全くないままで、単に自由というところだけにとらわれてしまう生徒だと、逆に今度デメリットになる可能性もあるとか、それは生徒の向き不向きにもよったりとか、例えば地域性とかかわりであったりとかもかわってくるので、そのシステムがあればすべてがそれで万全ということは、たぶんないのではないかなと思うんですが、ただその中で、今塩尻志学館がこの辺りのところでひとつ地域性を踏まえて、ああいう形が、いろいろな成り立ちがあって、背景があってできているということが一番よかったのかなと感じるのですが。

（中條委員長）

そういう主体性なり、明確な意思なりを持っていない子たちの進学先は、どうあればいいんですか。その柔軟性とか、多様化とか、選択の幅とかという面で見るとき。みんな普通高校へ行ってから、3 年間で考えればいいのだろうという部分が。

（長谷川委員）

基本的には普通高校へ進むのほうが多いかと思います。普通高校に行って、場合によっては例えば普通高校の中で、それは学校の実態によるのですが、学校の実態の中である程度進学校ということであれば、そんなに意識はないかもしれませんが、先ほどの蘇南高校さんの例で、ある程度いろいろあとのことを、進学であったりとか、就職も含めて、例えば将来的にはある程度就職も含めたところで、あるいは専門性を身に付けさせなければいけないところで考えるのであれば、そうなってくると今度単位制というのが逆にメリットが出てくるところがあるかもしれないなというふうに思います。

（中條委員長）

かつジョイント校とか連携校ということも含めてということですね。

ほかにいかがですか。今までのご意見は、塩尻志学館の結果としての好循環の中で、この形態を幾つも幾つもつくるというよりは、むしろ総合学科、現状でいくと、それをそのまま肯定する中で、連携校やジョイント校とか、形態がそれがベストかどうかは別にして、

単一である実業系、職業系の高校をジョイントして、その子どもたちが例えば転科や、学科が変われるだとか、単位制などを導入する中で必要最低限のプラスのところでも選択の幅を広げてやるかということのほう子どもたちにとってはメリットがあるのではないかというご意見が多かったような気がしますが、ほかに「いや、そうではなくてこうだよ」とかそれにプラスアルファで「この方法じゃないか」というご意見があればですが。

（野口委員）

ジョイント校と単位制を混ぜたというか、そんな形にした場合に、単位制の場合は3年以上の修業年限というのが出ますよね。単位を取るために3年ではなくて、もう少しかかるということもあるということですか。

（中條委員長）

どこかに書いてありますか。

（野口委員）

10 ページの多部制・単位制のところですよ。

（中條委員長）

最終報告のですか。

（野口委員）

はい、そうです。

3年以上の修業年限で卒業が可能になるというね。

（中條委員長）

ええ、2年では卒業できないといいましたよね。1年、2年では卒業できない。

（野口委員）

できない。

3年以上ということは、4年、5年、6年ということ。

（中條委員長）

3年も含めて。はい。

（野口委員）

含めてということですね。

ジョイント高校の中に単位制というものを取り入れた場合は、単位を取るために3年以上かかっていいというような、そういうような考え方もできるわけですか。

(柳澤教育主幹)

そういうことでございます。単位制というシステムを取った場合は、全日制であれ、定時制であれ、今のジョイント高校であれ、どういうところに導入しましても、総合学科もそうでございますけれども、3年以上の在籍でということで4年目、例えば松本筑摩の場合ですと、それでも8年というわけにいかないということで、スタートの時点で一応の上限を6年ということで定めてございまして、また持った単位はすべて有効ですから、いったん離れましても、また8年目ぐらいにもう1回やりたいと言っても、今まで持っていた単位をそのまま生かして、その上に積み重ねるという形になります。

そういうようなものが、単位制のシステムです。

(中條委員長)

一方学年制はどうですか。

(柳澤教育主幹)

学年制の場合は、その学年の単位を全部取りませんと、基本的には次のステップには上がりませんので、留年をしてもう1年同じ学年をゼロからやるということですから、ご破算で願いましてはとなってしまふということがございます。

もちろん留年をして4年かかってということだって、それは当然あり得ることではあります。

(中條委員長)

学年制は、上限年数はありましたか。

(柳澤教育主幹)

恐らくないと思いますが。

(中條委員長)

では10年かかってもいいんですね。

(柳澤教育主幹)

ちょっと確認させていただきます。

(中條委員長)

すみません。では一応単位制と学年制の違いを踏まえて。

(野口委員)

ジョイント高校の中で、自分の取りたい学科があった場合は、どんな形で取ればいいのか、それも魅力のある学科というものも。

(中條委員長)

単位制との絡みで。はい、分かりました。

当然ジョイントだから、学科が違う学校同志がうまく組み合わせてという、そういう意味でいいですか。

(野口委員)

はい、そうです。

(中條委員長)

はい、分かりました。

木曽の中で、何かアイデアはありますか。

(野口委員)

そうですね。特色ある学校、山林がありますし、そういうようなところでその普通高校の中でも環境について学びたいとか、そういう子どもたちも中にはいるようです。それで、そんな可能性もできるのではないかなと思います。

(中條委員長)

それは普通科の子であってもですか。

(野口委員)

そうですね。林業とか山とか、自然の中にいるからそういうものもよく学べるんじゃないかという、そんな意見です。

(中條委員長)

ありがとうございました。

ほかに何かご意見はございますか。

そうしますと、総合学科についてはいったん既設をそのままにして、それを幾つか増やすというよりは、総合選択制を含めてですが、子どもたちの選択の幅を広げてあげるといいう中で、連携とかジョイントだとか、それから既に取り組みまれているとしゃると思いますが総合選択といったようなところで、地域、地域の今の置かれている学科の編成等も絡めながら、より選択の幅を広げていけたらどうかということで、今日も名前が出ましたけれども、具体的なジョイントイメージというか、連携イメージについては、次回以降の中で各論を出して、この地域はどうなんだとか、この地域にいえばどうなんだということで、またさらにご意見をいただいきたいと思います。

これまでのところで、何かご意見等ございますか。少なくとも多部制・単位制、総合学科についての否定論はなかったと、これについては複数校のニーズというか、意見、それはむしろ前後した上で、もうちょっと違う形態でそれがうまく、先ほどの言葉を借りると多様化・柔軟化というものに絡めて、子どもたちの選択の幅を広げていければいいんじゃないかということのご意見が多かったと思います。



それでは、時間がもう少しありますので、次回は前回の意見、議論を方向性の確認を踏まえて、今回はその資料が間に合わないという可能性も前回ございましたので、多部制・単位制、それから総合選択制に絡めての議論を中心にしてまいりましたが、より具体的個別論議に入るために、学科人数から見た、例えばシミュレーションだとかをベースに我々として考えていくか、もしくは同じことを県教委の検討プロセスの中でやってきたはずであるので、それをいったん示していただきながら、校名提示は別にして、そのプロセス、過程という意味でそれを示していただきながら、我々が検証していくことも、同じ意味ではいけるのではないかと思います。

ゼロスタートでやるよりは、そのほうがいいのではないかというご意見をいただいておりますが、次回の進め方はいったんそれをベースにということではよろしいですか。かつ総合選択制、多部制・単位制は新しい第4通学区全体で議論すべきということで、今日は進めてきましたが、次回以降のところは、今日はこれだけ、今日はこの地域だけということではなくて、よりその地域地域を絞って議論が必要になるだろうと、第4通学区全体ということではなくて、より地域、今日は10区なら10区という、もしくはこの課題は12区の課題というような位置付けで議論していくべきだというのが前回のご意見だったと思います。

そういう進め方で、県教委のほうからも提示がいただけるのか、もしくはこの前の意見をベースにいただいた資料の中で、取りあえずたたき台をつくって、それで意見交換の中で県教委からも、「いや、この数字はそうではなかった」と。今日のご説明もありましたけれども、そういう進め方をしていったほうがいいのか、その辺をちょっと、もしご意見があればですし、もしなければ県教委からも前回は踏まえてのご説明といえますか、ご意見をいただいて我々として次回の進め方を決めていきたいと思います。

委員のみなさんは、特にご意見はよろしいですか。

はい、では、柳澤さんお願いします。

(柳澤教育主幹)

はい。

今、委員長さんからご提案のとおり、次回事務局としてこの候補案を策定するに至る経過、またそのプロセスにつきまして、資料を提出してご説明申し上げたいと、こんなふうに思っております。よろしくお願いいたします。

(中條委員長)

はい。

では次回は、今ご説明いただいたように、資料提示をいただきながら、それをたたき台にして検討を進めていくという前提でやっていきたいと思います。次回に向けて、何か資料提供を含めてご要望等ありましたら、先に確認させていただきます。

よろしいですか。

引き続きまた配布資料等については、私のほうで事前に事務局と調整させていただいた上で確認させていただきます。

それでは、ちょっと今日は早いんですが。

(鈴木委員)

すみません、意見なのですが、最初の我々の任務のところに、4つの任務があって、第4のほう、1、2、3に関することというのがあったですね。そういうことでいうと、私は総合学科、志学館と筑摩の現状なんかも知りながら、この推進委員会として第4通の多部制・単位制、総合学科として、これからどういう改善点があったり、かわりがあるとかということもお聞きしながら、よりよいものにしていこうということである、できれば2校の先生の意見を聞くとか、あるいは校長先生の意見を聞くとか、あるいは見に行かせていただくとかというようなこともあっていいのかなと思います。

(中條委員長)

たぶんそれだけではなくて、今日もほかの名前も当然ありましたし、その中でたぶんそういう場面が、その2校以外にも当然必要になってくると思いますので、いったんちょっとある意味、そこまで深く入りきれていませんけれども、多部制・単位制、それから総合学科について、いったん今日の議論で、次回ほかと絡めてより具体的になってきたところで、今の鈴木委員のご意見を含めて確認をする場なり、ヒアリングをする場なりを設けるという前提にいきたいと思います。

ほかはご意見ございますか。よろしいですか。

それではたぶんある意味、次回からが本番というとおかしいですが、より具体的な議論に入る必要があろうかと思います。そういう意味で、資料等もし必要があれば県教委のほうに、事前に、この場でもしなくても事前にお話しただいて、要求いただいても構わないと思いますので、県教委のほうは大変だと思いますけど、よろしくお願いいたします。

そういうことで次回もしかしたら延びるかもしれないということを前提に、今日は早く終わりたいと思いますけど、次回日程の件について事務局、お願いします。

(西牧主任教育支援主事)

よろしくお願いします。

次回の日程につきましては、8月の28日の日曜日の午後をめどにと考えております。また委員長さんともご相談の上、あらためてご案内申し上げますので、よろしくお願いいたします。

(中條委員長)

時間設定は。

1時半から4時半ですか。

(西牧主任教育支援主事)

1時半から4時半というふうに考えております。

(中條委員長)

場所は、まだ未定でよろしいですね。

（西牧主任教育支援主事）

場所は、松本市の教育文化センターを一応目途に考えております。里山辺です。

（中條委員長）

はい。旧山辺中学の近くか何かでしたっけ。

（西牧主任教育支援主事）

そうです。

（中條委員長）

また地図等でご案内いただけたらと思いますがお願いいたします。

では、以上をもちまして、第4通学区第5回の推進委員会を終了させていただきます。

では次回は28日ということで、よろしくお願いいたします。どうもお疲れさまでした。

ありがとうございました。